

書 評

整形外科 用語のいざない

国分正一 著

東北大学名誉教授の国分正一先生が2002年から16年の長きに渡って連載されたコラム「整形外科用語の散歩道」を中心に700篇をまとめた本であり、読ませていただく機会をいただいた。

整形外科用語集に記載された個々の用語の語源や語素を、ラテン語どころかギリシア語まで遡り、その歴史的背景や、造語者や初出など、根拠になる文献まで挙げてある。そこから派生したいろいろな各国語を医学分野にとどまらない文化的言語についてまで言及されている。深い教養と膨大な知識と勉強量が背後にあることがよくわかる大労作である。

毎号楽しみに読んでいたが、まとめて一冊の本になると、ABC順の配列と各コラムが語源への訴求と派生語という一定形式を必ず含んでいるために、連載時よりやや字典的な要素が強くなったように感じる。

一気呵成に読み切ると読む本（ほん）とは性格を異にした本になっており、それを期待するとやや違和感を覚えるかもしれない。

しかし、いきなり字義や語源に入らず、導入部は、親しみやすい話題から入るように工夫もされており、締めの部分のひとつも魅力的である。

それらに惹かれて通読すると、16年間の整形外科がたどってきた変遷も感じ取れ、単なる字典にはとどまっていない。

浅学の私には、知らない用語もたくさんあり、尾骨が鳥の郭公（かつこう）に由来するなど意外的な思いを何度もさせられ、整形外科がいかに浩瀚なものであるかも実感させられた。

若い先生方が字典的に使っても良いし、専門医化したベテランが、再度、整形外科の守備範囲の広さを最認識するにもきわめて有用である。

さらに語源からの意外な広がりや展開に、西欧文明の連綿とした伝統と、各国民国家への分裂を反映しているようにも感じるのは私だけだろうか？

もっとも、そちこちに散りばめられた、著者の若かりし頃の思い出話や、教授時代の経験、さらに退官後も研究を粘り強く続けられた結果の臨床的 Tips もまた本書の大きな魅力であり、貴重な遺産であり、ある意味筆者がもっとも伝えたいことのようにも感じられ、筆者の人柄と医療への真摯な姿勢に惹きつけられる。

もっとも Creeping substance の項に “Old age creeps on me before I realized” と記載があり、最近衰えを感じる私はいささか打ちのめされたが…。

過去への視線は、未来への視線の土台である。「オリジナルを知らずして、Modified を語るなかれ」と私はよく若い先生方に説教するが、この本は今の整形外科のまさに土台であり、基礎となるべき貴重な本である。ひとつでも新たな用語を付け加えられるような努力を若い医師に促しているようにも感ずる。

さまざまな使い方の可能性を秘めている労作である。読破するも、折にふれ紐解いても良い本である。ぜひ机上に一冊常備しておいて欲しい。

西野仁樹（国立病院機構相模原病院）
〔金原出版、本体 3,800 円〕

